

名戸ヶ谷ビオトープだより

第51号 2012年秋号

<http://nadogaya-biotope.org/>

名戸ヶ谷ビオトープを育てる会発行
発行責任者：篠崎 将 Tel/Fax: 04-7173-6353

今年の稲刈り

真夏の稲刈り、大変でした」

8月11日に雀避けネット掛けをして約1ヶ月後の9月8日、ネットを外して、稲刈り開始です。猛暑の中、ネット外しで一汗かいてからの作業です。数日前の雨もまだ田んぼに残り、もともと深い田んぼが更に大変な状態の足元になっています。稲を刈る



人、運んで棚に掛ける人も汗だくでした。昼に、おにぎりで腹ごしらえして再開しましたが、初日は木道から北側を刈って終了。

翌日も猛暑。もち稲の残りとうるち稲の刈り取りです。もち5番とうるち1番から3番までで2日目を終了。残りは10日、11日の作業となりました。本当にお疲れ様でした。乾された稲の長さから見て、ほぼ昨年と同じ収穫量になりそうです。月末に脱穀して、粳摺り・精米を藤心ライスセンターにお願いします。

(文：小笠原智 写真：佐々木光正)

今年の案山子は「野田総理」と「ロアラ」です



ドジョウ総理の野田さんを案山子にしました。なでしこジャパンの澤さんも五輪タイプに変えています。パンダ親子だけでは寂しいので、コアラ親子を追加しましたよ。



台風よ 来ないで！

9月2日、猛暑の中、全長約90m、2段掛け棚を作成しました。

去年は、台風15号で全壊したので、今年は中央木道側も木杭を立てて稲掛け棚パイプを組みました。斜め材を増やしましたが、台風には勝てません。



ちょっと珍しい昆虫 ムツボシタマムシ

6月11日、ビオトープで観察されました。



今年のヘイケボタルについて

ホタル観察会を終え昨年2匹の実績が、今年は4匹発光確認し増加で大変嬉しい事でした。昨年からの幼虫飼育からを振り返ります。

幼虫飼育

・2011.12.17(土) 合同作業日に松清さんからホタル幼虫を篠崎さん、村川さん、影山さん、小笠原さん、そして小生と各30匹ずつ150匹を分けて頂き、松清さんは50匹をと計200匹の水槽飼育の始まりです。定期的にエサのサカマキガイを田んぼまで取りに出かけました。

配水管設置

・2012. 3.20(土) 合同作業日にBゾーンホタル用水路への配水管設置を行ない、湧水地から安定的に水流を確保しホタル生息地環境は大きく改善です。

幼虫放流

・2012. 4.21(土) 合同作業日に飼育会員が4ヶ月に亘り手塩にかけたホタル約200匹をBゾーンホタル用水路へ放流。そして餌となるサカマキガイ、カワニナを定例作業日のつどそこに蒔き、又付近の草刈りも合わせ実施しての生息地保護です。

ホタル観察会

・2012. 7. 2(月) 会員7名参加。Bゾーンホタル用水路の草の中で1匹発光して活発に草から草へ飛び回っていました。



・2012. 7. 8(日) 会員5名参加。ホタル用水路の新設配水管の出口付近で1匹が発光していました。

・2012. 7.15(日) ボーイスカウトのアライさん家族3名と小生の参加。ホタル用水路の新設配水管の出口付近で1匹と、アライさん家族が、Bゾーン湧水地の石の階段脇草むらで1匹発光しているのを発見。

会員の幼虫飼育協力により年毎にホタル成虫も増え、観察会も延べ16名の多数参加でした。淡い光を放つホタルは暫し感動させてくれました。来年は更に増えるのを期待し、課題として「回生の里」側の遮光対策が必要です。

(生きもの担当 藤平三郎)
(写真は幼虫の放流時のもの)

ビオトープの片隅で水草の実験

ビオトープのAゾーンの南の水路になにやらネットを張った箱が沈められています。

これは「かしわ環境ステーション運営協議会」の「手賀沼水系ワーキンググループ」のメンバーから名戸ヶ谷ビオトープの水路で実験をしたいという依頼があって設置しているものです。

水生植物(かつて手賀沼に繁茂していたガシャモク、ササバモなど)を内部に置いて、水草が生育することを確認したいという実験だということです。

これらの植物は、ザリガニなどによる食害に弱いことがわかっているので、ザリガニなどの侵入防止のためにネットを張った箱の中に、被試験用の水草を入れて、観察しているとのこと。



箱の中で生育するササバモ 普段はネットを張ったフタをしてある。

ゆったりとした空間



名戸ヶ谷ビオトープと縁の深い川、大津川を探索することにしました。

大津川というのは、改めて言うまでもなく、大堀川と並んで、手賀沼に注ぐ二つの大きな川の一つです。名戸ヶ谷ビオトープは大津川の支流の一つとながっています。

一級河川

大津川は一級河川なので、国土交通省の所管ですが、実際の管理は千葉県県土整備部が行っています。大津川に関する要望とか、日常のように行われている河川改修・拡幅などに関しては千葉県県土整備部に問い合わせることになります。

名前の由来と流域

地元では、大川と呼ばれてきましたが、大

津ヶ丘団地ができて古の名称が復活しました。名前の由来は平将門が手賀沼を琵琶湖にたとえて、この河川の河口辺を大井津と名づけたと将門記に書かれているそうです。

東葛飾郡誌には、大津川は鎌ヶ谷村粟野入道池・佐津間瓢箪池を水源とし手賀沼に注ぐ全長二里の水流と記されています。

河口から中之橋までを探索

河口は手賀沼の南岸にあります。今回はそこから県道282号（柏-手賀線）にかかる中之橋までを探索しました。本当は川岸を歩くのがいいのですが、体調不良で歩くのがつらいので、バイクで橋から橋へと動くという変則的な探索になりました。ちなみに、大津川の堤防の上はあまり歩きよくありません。一部だけアスファルト舗装がしてあります

が、多くは雑草の道です。

千葉県県土整備部の話では、草刈りは年に2回ということだそうです。草を刈った直後はまだしも、多くの時期では雑草に悩まされながらの探索になります。堤防はほとんど自動二輪は乗り入れ禁止ですが、自転車はかなり入れるようです。しかし、雑草が伸びている時にはつらいものがあるでしょう。

大津川は源流から河口までの高度差は少ないので、川そのものはあまり変化がなく、川をはさんでは水田が広がるというのが基本的なパターンで面白みがありません。少し斜面林にまで足を伸ばして、探索した方がいいかもしれませんが、次の課題とします。

河口からヒドリ橋



河口に一番近い橋がヒドリ橋です。これは車通行禁止の遊歩道（自転車は可）の橋で、手賀沼周回のふれあい道路にかかる橋です。ここではジョギングしたり、あるいは本格的に走り込んでいる陸上の選手が走っていることもあると



いう橋です。

この橋をはさんで制水弁の設備があります。

大津川橋

この大津川には実に多くの橋がかかっています。農道に近いような感じの道路



に接続しています。大河川と違って、橋を架けやすいのかも知れません。これもその一つで、ヒドリ橋からわずかに上流にあります。交通量はわずかです。

双子橋



次に上流にあるのがふたご橋です。これは沼南方面から柏の戸張方面に抜ける道ですが、交通量は少ないです。

このあたり、釣り人が結構多いです。水は見

たところ、あまり汚いという感じはしません。においも感じられません。

上沼橋

さらに上流で、国道16号にかかっている橋です。南方には沼南エリカが見えます。この橋の下をくぐる道があるのですが、かなり雑草に覆われていて、散歩道としては歩きにくいものがあります。



中之橋

さらに上流へ約500メートルほどにあるのが、県道282号線にかかる中之橋です。この橋は2年ほど前に架け替えられ、片側歩道付きの立派な橋になりました。

この近辺は最近コブハクチョウが群れをなして泳いでいるのがみかけられるようになった。これはヨーロッパなどから飼い鳥として持ち込まれたものが逃げ出して繁殖した外来種とのことです。

この中之橋の下流左岸に水浄化施設(注)がありますが、現在は使われていないということです。(高田)



(注)接触酸化方式による。曝気式浄化槽と類似。微生物の付着している礫層に水を通す。



作業日誌から (定期合同作業と臨時の作業)

右上から反時計回りで

7/21 草刈り

// 肥料散布

8/11 ネット張り

// ネット張り

8/18 作業後の歓談



写真：佐々木光正

ビオトープと人

木村きくさん

木村のおばあちゃんとしてビオトープの会員に親しまれている木村きくさんをお尋ねして昔のことを主にお聞きしました。

このところ、あまり姿を見かけなかったのは、具合が悪いということではなく、今年の夏の暑さに外へ出る気がしなかっただけのことです。

木村きくさんは大正13（1925）年9月23日生まれということなので、数えて88歳、米寿です。柏市から、従来でていた米寿のお祝いがでませんというお手紙が来たとのこと。

大した経費節約にもならないのに、せつかく期待していたお年寄りの楽しみを奪うのはどうかと思いますね。

きくさんの実家は八幡町だそうです。生まれたのは豊四季、現在は旭町で農家でした。敗戦前は、勤労働員で十余二の飛行場まで通って、草刈りなどを

したそうです。この頃は軍の病院だった、現在の柏市立病院の横を歩いたとのこと。

このころは農家でも食料事情は悪く、イモや麦を沢山入れたご飯で、お客さんでも来ないと白いご飯は出なかったそうです。それでお客さんが来ると、早く帰らないかなと思ったとのこと。

戦後、農地解放で農地を手にすることができました。8人兄妹の2番目だったきくさんは24歳のとき、名戸ヶ谷の木村家に嫁してきました。農家へ嫁に行くのは当然と思っていましたが、兄妹で農家へ行ったのは結局自分一人だけでした。

夫の由男さんは「兵隊」というあだ名で呼ばれていましたが、それは夫の父親が明治の

時に兵隊になって日露戦争へ行ったから付けられたあだ名だそうです。この義父はとてもいい人だったとのこと。

きくさんは4人の子どもを産みましたが、一番上の子は亡くなりました。このときは熱が出る疫病が流行り、部落で7人もの子どもが亡くなったそうです。辰雄さんは2番目でその下は女の子で、近くに嫁に行っているそうです。



お嫁に来た時は、周りには水田で、我孫子の方まで何もなかったとのこと。手賀沼へはときどき行って、ドブガイをかますに一杯取ってきて、これは味噌煮にするとうまかったそうです。ほかにドジョウ、シジミ、ウナギ、タニシなどを取ってきて食料にしました。

ホタルはそれはそれは多く飛び交い、蚊帳の中に入れて楽しんだものです。

田んぼは昔から泥が深い田んぼで、大層苦勞しまし

た。

今、ビオトープの会でお借りしている倉庫の奥に住まいがあったわけですが、かつてはここに池があり、きれいな水がわき出て、飲料にもなったとのこと。ただ、水のせいで、家の床板が腐るといこともあり、高台の今の場所に家を建て替えたとのこと。

きくさんのところにはビオトープだよりもきちんと取ってありました。メガネをかけなくても読めるし、耳もいいし、歯も丈夫ということであらやましいです。腰が曲がってちょっと歩きにくいけれど至って丈夫で働き者のきくさん、元気で生きて、家族に迷惑をかけないような死に方がしたいとのことですが、長生きしてください。（高田）

ビオトープの鳥—スズメ

近年日本全国でスズメの数が減少していると云われています。

スズメほど日本人に身近な鳥はいないでしょう。北海道から沖縄まで季節を問わず人の住んでいるところで、必ず見かけるのがスズメです。日本人にとってなじみの深い鳥で、民話や童謡、ことわざなどにもよく登場します。しかし、その生活や行動については、意外と知られていません。

「スズメはなぜ、人のそばで暮らすのか」

スズメの生活の場は、殆ど人が生活しているところに限られています。しかし彼らはいつも人からはある程度の距離をおいて生活しています。ある調査によると、人家の数が増えると、スズメの数も増えると云われています。スズメは軒先や戸袋に巣をつくることもあり、いつも人間の近くにいます。樹木に巣づくりすることもあります。公園の木など人家に近いところです。理由はエサが大きく関わっていると考えられています。雑食性ですが、基本的には植物の種、特に穀物を好んで食べます。住宅地の周辺に裸地が増えると、そこにイネ科の雑草が繁茂します。また、ビオトープのように稲を栽培するため、エサが豊富になります。人家のスキマに営巣して、農耕地でエサを求めるといったパターンが出来上がったものと思われます。しかしスズメというと、米を食べる鳥というイメージがありますが、実際は米以外の雑穀を好んで食べます。米は実る前の乳熟期を最も好みます。

ビオトープに多く見かけるスズメ



「スズメの生活の場は、1年中同じ場所か」

スズメは留鳥とされていますが、標識調査によって新潟県から神奈川県、静岡県、愛知県に移動したことが解っています。移動は幼鳥が多く、生息地の密度を必要以上にあげないためと思われる。その年生まれた幼鳥は、秋から冬にかけて木々の葉が落ちるころ、大群を作って移動します。生活の知恵です。

「スズメはきれい好き」

スズメは水浴びが大好きで、夏冬を問わず一年中水浴びをします。水深1~2cmの浅い水たまりに体をつけ、激しく羽ばたいて水浴びをします。積雪地帯では雪浴びをすることが観察されています。また、砂場や乾いた畑の土で砂浴びもおこないます。

水浴びと砂浴びの両方をする鳥は、珍しいです。水浴びも砂浴びも、寄生虫や体の汚れを落とし、羽毛を清潔にたもつために行われます。浴びた後は入念な毛づくろいを行います。鳥は一般的にきれい好きです。

「スズメの巣立ち」

繁殖期は2~9月なので、早いところでは3月に雛を見かけることがあります。親鳥は巣立ち後も、約10日間餌を運んでいるので、地上にいる雛を見つけてもむやみに近づいたり保護したりしないで、そっと見守ってあげましょう。人が手を出すと、親が放棄してしまう恐れがあります。

(文：篠崎 将)

編集後記

今号も幹事を始め、皆様のご協力で、多くの原稿をいただき、なんとかまとめ上げることができました。

今号から、大津川探索シリーズを始めましたが、やりはじめると、意外の難しさがあることに気がつきました。その種明かしはいずれしなければなりません。

せんが、いずれにせよ身近な川であり、柏南部から鎌ヶ谷方面に住む人に、大いに関わりのある川であるのに、田んぼの中を流れているせいもあって、地味で目立たない川です。この川に関して話の種があればお知らせください。

そのほか、「ビオトープと人」ということで、ビオトープに関わりのある人を随時とりあげていきたいと思えます。(高田)